

縄文土器の性格

解説 設楽 博己



(①長野県石小屋洞穴遺跡出土、國學院大學博物館蔵、②北海道中野A遺跡出土、市立函館博物館蔵、③千葉県二ツ木向台貝塚出土、南山大学人類学博物館蔵、④長野県井戸尻遺跡出土、井戸尻考古館蔵、⑤千葉県上新宿貝塚出土、京都大学総合博物館蔵、⑥東京都小豆沢貝塚出土、東京国立博物館蔵)

縄文土器と弥生土器

縄文時代と弥生時代は、そもそも土器の違いによって区別された時代であったが、研究の進展によって採集狩猟と農耕という経済の違いで区別されるようになった。縄文時代は草創期から晩期までの6つの時期に区分されるが、これも土器の変化にもとづく。

一方、『詳説日本史』(日探705) p.15の弥生土器の図版をみると、変遷ではなく前期の弥生土器としていろいろな形の土器が集合した写真が掲載されている。弥生時代は早期から後期の4時期に区分されるが、それも縄文時代と同様に土器の変化にもとづく。

ならば、おなじ教科書でなぜ縄文土器と弥生土器のこのような扱いの違いが生じたのだろうか。

縄文土器がつくられたのはおよそ1万6500年前から2500年前の1万4000年間と、とても長い。そこで土器型式の変化をとらえて6つの時期に区別したのである。それぞれの時期に10以上の型式があるから、「縄文土器の変遷」として掲げた図版は、文字のない時代の年表に相当する。

さらに、この6つの土器はいずれも「深鉢」であることに注意しなくてはならない。採集狩猟民で

ある縄文人の食器の基礎は、食料を煮るための深鉢であった。その一方で、弥生土器の図版が大小の「壺」、「甕(縄文土器の深鉢)」、「高杯」の器形のバリエーションで構成されているのは、弥生時代が水稲耕作を生活の中心とする時代であるからだ。壺は種籾などを貯蔵する器として、高杯は食料を盛り、時に儀礼の器として使われた。

縄文時代と弥生時代の継続期間や生活スタイルに応じた土器の性格の差異が、図版の扱いの違いに反映しているのである。

縄文土器の形と文様、その変遷と地域差について、弥生土器の違いに留意しつつみていこう。

形と文様

縄文土器の代表的な器形が深鉢であることは間違いがないが、浅鉢も代表的な器形である。さらに台付鉢形土器や皿形土器、液体を入れて注ぐ土瓶のような注口土器、あるいは異形台付土器や香炉形土器といったかわった形の土器もある。これらの特殊な器形の土器はとくに念入りにつくられており、儀礼に用いられたのであろう。

図版に掲げた土器の大半は、口縁部が波打つ。もちろん平らな口縁の土器もあるが、弥生土器と比較すると、波状口縁が縄文土器の器形の特徴と

いえる。

弥生土器の壺は貯蔵の、そして甕はコメなどを炊く用途があり、いずれも蓋を必要とするので口縁が平らになった。縄文土器はその必要はなく、土器自体に儀礼的な性格が強うかがえる。

それは文様にも当てはまる。弥生土器はヘラや櫛によって水平につけた沈線文や単調な突帯が主流であり、文様は総じて単調である。

それに対して縄文土器は③のような複雑な縄文、④のような立体的な装飾、⑥のような繊細な入組文が展開した。立体的な山野を生活の場とする狩猟民と、森を切り拓いて造成する平板な水田を基盤とした農耕民の世界観の違いを反映しているかのようである。

変遷と地域差

縄文時代草創期の土器(①)は、器形や文様が単純で平口縁ばかりであるなど、日本列島で大きな地域差はない。

早期中葉に波状口縁が生じて(②)地域型式も多彩になるが、温暖化にともなって旧石器時代的な遊動生活から1カ所に居を定めた定住生活へ徐々に進展してきたことと、それによる精神生活の複雑化を物語るのであろう。

前期になると尖底土器(②)から平底土器(③)に変化するが、それは屋外で石をかませて固定した土器で煮炊きする生活から半恒久的な住処である堅穴住居での暮らしへの変化に対応する。浅鉢が加わるなど、器形の増加も定住生活のさらなる進展による生活の多様化とみてよい。

中期の土器(④)に極度に立体的な造形が好まれたのは、長野県域や山梨県域といった中部山岳地帯である。近年、この地域の中期の土器からダイズの圧痕が多数検出されるようになり、農耕とまではいえないが高度な植物の管理栽培のあったことがわかってきた。それに支えられた一種の文化的な高揚がこのような豪快な造形をもたらしたの

ではないだろうか。

後・晩期になると注口土器が普及する。また、異形台付土器や香炉形土器などが加わって器形が複雑になり、特殊な土器を使った儀礼の強化がうかがえる。中期的な立体感は乏しくなる一方、縄文を沈線で区画して部分的になで消した磨消縄文など、洗練された意匠が好まれるようになる(⑤・⑥)が、縄文を中心とする複雑な文様という点では、やはり弥生土器との違いが著しい。

以上、説明してきた図版の土器は、いずれも東日本の遺跡から出土したものである。西日本の縄文土器も、注口土器がつけられるなど多様性がないことはないが、後期後半以降では深鉢と浅鉢にほぼ限定され、文様もほとんどみられず、東日本の縄文土器と著しい対象をなすようになる。東日本の土器が複雑化の過程をたどったのに対して、西日本の縄文土器は単純化の過程をたどったといってもよい。

土器複雑化の背景

東日本では、縄文時代前期以降の温暖化にともない、ブナ・ナラなどの落葉広葉樹林が広がって定住生活が進展し、集落の規模が大きくなり人口も増えた。中期には環状集落が発達するが、そこで営まれた堅穴住居や墓とそれにとまなう遺物を分析すると、親族組織を整備し、集団を儀礼によってコントロールする社会が形成されていたことがわかる。

後期以降、環状列石など協業による大規模な葬祭センターが成立し、さらに土偶や石棒、土版、岩版といった、直接生産に関わることのないいわゆる第二の道具が発達し、祖先祭祀などの儀礼が盛行した。

東日本の縄文土器の器形の多様化や装飾性の増加現象は、東日本に特有に認められる儀礼強化を通じた社会複雑化の一環であろう。

(したら・ひろみ/東京大学名誉教授)